

研 究

障害のある子どもを育てる母親の子育て観 オンラインワークショップの実践と評価

松澤 明美¹⁾, 吉澤 剛²⁾, 眞崎 由香³⁾, 鳥本 靖子⁴⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、障害のある子どもを育てる母親を対象に実施した子育て観オンラインワークショップを評価することである。本ワークショップの対象は、定期的・継続的に医療・福祉施設を利用する障害種別を問わない1～18歳の子どもの母親である。ワークショップ参加者には、事前に個別にQ分類法を用いた子育て観に関するカードワークを依頼し、その結果を踏まえて子育て観が類似した複数の母親とファシリテーターが1つのグループとなって子育て観について話し合った。終了後にWebアンケートに回答した母親9人は、30代2人、40代5人、50代2人であり、子どもの平均年齢は10.4歳であった。本ワークショップに参加して満足できたかでは「満足できた」55.6%、「まあまあ満足できた」44.4%、本ワークショップを家族や友人・知人に勧めたいかでは「勧めたい」66.7%、「まあまあ勧めたい」33.3%であった。また自由記載から、参加者は【子育てする自分の価値観をみつめなおすことができた】【他の人の考えに触れて刺激を受けた】【いい時間を過ごすことができた】【グループワークの運営方法にさらなる工夫が必要】と感じていた。これらの母親は、本ワークショップを肯定的にとらえており、また子育てする自分をみつめなおし、自分の価値観やその特徴を認識する機会と感じていた。今後は本手法の効果がより発揮される方法の工夫、多面的かつ精度の高い効果測定による評価が課題である。

Key words : 障害のある子ども, 母親, 子育て観, オンラインワークショップ, Q方法論

I. 目 的

障害のある子どもの子育ては、子どもの障害や特徴に応じたケア、それに伴う時間を必要とする。そのため、これらの子どもの家族は自身の健康や暮らしに影響を受けることが多く、なかでも主に子育てを担う母親への影響は大きい。既にこれらの母親の身体的・精神的健康^{1,2)}、就労を含めた社会生活^{3,4)}への負の影響が明らかにされているが、未だに母親への支援は多くの課題が残っている。

障害のある子どもへの支援を検討するとき、

「子育て観」は注目すべきアウトカムのひとつと考えられる。この子育て観への着目の理由には、近年の子育てにかかわる社会環境の変化がある。わが国では女性の就業率、夫婦共働きの割合が年々上昇し⁵⁾、成人期の女性のライフコースは拡大している。加えて、障害のある子どもへの福祉サービスをはじめとする公的支援は、決して充分とはいえないながらも年々整備されてきている。このように、母親のライフコースと子育て環境が多様化した現代社会では、個人のもつ価値観はより一層、その重要性を増しており、これらの母親のもつ子育ての価値観を把握することは、支援して

Practice and Evaluation of an Online Workshop on Child-rearing Values of Mothers Raising Children with Disabilities

Akemi Matsuzawa, Go Yoshizawa, Yuka Masaki, Yasuko Torimoto

1) 北海道大学大学院保健科学研究院創成看護学分野 (研究職/看護師)

2) 関西学院大学イノベーション・システム研究センター (研究職)

3) 茨城キリスト教大学看護学部看護学科 (研究職/看護師)

4) 浜松医科大学医学部看護学科 (研究職/看護師)

[JCH-22-040]

受付 22. 5.23

採用 22.11.16

いくうえで重要な視点と考えられる。また、価値とは、失敗や障害などの困難があっても自らの意思により継続してきた、行動すること自体に喜びややりがいを感じられる行動や状態の性質を言語的に表明したものである⁶⁾。そのため、価値観は行動を動機づけ⁷⁾、さまざまな心理社会的状態の理解に重要である。これらのことから、母親自身の子育てにおける価値観が明確になることは、子育てや暮らしの動機づけになる可能性があり、母親にとっても有用と考えられる。

障害のある子どもの家族の子育て支援としては、従来、前向き子育てプログラム⁸⁾をはじめとする親子のコミュニケーションや、子どもの問題行動への対処法などの具体的な子育てスキルのための介入が実施されてきた。しかし、近年それとは異なる家族自身のヘルスプロモーションを含めた包括的な子育て支援プログラムが国内外で展開されている。具体的には、これらの母親の健康と Well-being の向上を目指したワークショップ型プログラム⁹⁾、コミュニティでのピアグループ基盤型プログラム¹⁰⁾、また、家族のエンパワメント向上を目的としたオンラインを活用したピアグループ基盤型プログラムなどである¹¹⁾。さらに、女性のライフサイクルにおけるアイデンティティの成長に向けて、女性自身の個としての自分と母親としての自分の葛藤から統合までの過程の支援をねらいとする小集団プログラム¹²⁾も実施されている。このように、障害のある子どもの家族支援では子どもの養育スキルのみではない、子育てする家族自身に焦点を充てた介入プログラムが必要と考えられる。

これらを踏まえて、本研究では、障害のある子どもを育てる母親の支援に向けて「子育て観」が支援のアプローチとして有用となる可能性があると考え、母親の「子育て観」に焦点を充てた子育て支援プログラムについて検討した。しかしながら、「子どもを育てること全般に対する個人の見解、考え方、価値観、認識、印象、期待の層体」¹³⁾である子育て観は複雑な概念であるため、日々忙しい子育てにおいて、これらの母親が自ら考えて明確にすることは難しい。また、これらの母親が日常生活のなかで時間的な余裕をもつことや外出が難しいこと、コロナ禍であることを考慮すると、オンラインを活用したプログラムが有用ではないかと考えた。そこで、本研究では、障害のある子どもの母親を対象に子育て観を価値観測定の一手法である Q 方法論を用いて測定したうえで、ピアグループによる

子育て観オンラインワークショップを計画・実施・評価し、今後の課題について検討したので報告する。

II. 対象と方法

1. 研究対象者

本ワークショップの対象は、障害のある子どもを育てる母親である。子どもの障害種別は問わず、定期的かつ継続的に医療・福祉機関の支援を必要とする 1~18 歳までの子どもの母親とした。合目的なサンプリングの考え方に基づき、参加者のリクルートにあたっては、関東・東日本圏内の重症児デイサービスの提供施設（103 か所）の管理者と関東・中部地方にある親の会（3 団体）の代表者等へ、本研究および本ワークショップの目的や趣旨を記した説明文書と本ワークショップの概要を示したフライヤーを各施設（1 施設につき約 3 枚）に郵送し、通園する子どもの母親への配布を依頼した。フライヤーには、本ワークショップへの参加を希望する場合の QR コードを通じた申込み方法について記載した。

2. 障害のある子どもを育てる母親の子育て観オンラインワークショップ

1) 本ワークショップのねらいと方法

本ワークショップのねらいは、障害のある子どもの母親が、自分がどのように子育てしたいかを、障害のある子どもの母親同士ともに考え、今後の子育てや暮らしに関する気づきを得ることである。本ワークショップまでの流れは図に示したとおりである（図 1）。

まず参加者は申し込み時に、①カードワークのみの参加、②カードワークとワークショップへの参加、いずれかを選択し、参加したすべての母親に対して、子育て観の測定を実施した。これらの母親の子育て観を明らかにするために、個人や組織の内面にある捉えづら価値観等を定量的に測定することを可能とする質的・量的研究方法（Quali-Quantitative Methods）の一つである Q 方法論を用いた¹⁴⁾。具体的には、Q 分類法と呼ばれる、ステートメントというテーマに関する価値観が書かれた複数枚のカードを、最も重要視するものから最も重要視しないものまで比較して、Q グリッドという山型の形に並べる方法によって子育て観を測定した。そのために、本研究ではカードワークと称して事前に作成した子育て観に関するステートメントが書かれた 47 枚のカードを研究対象者に郵送して

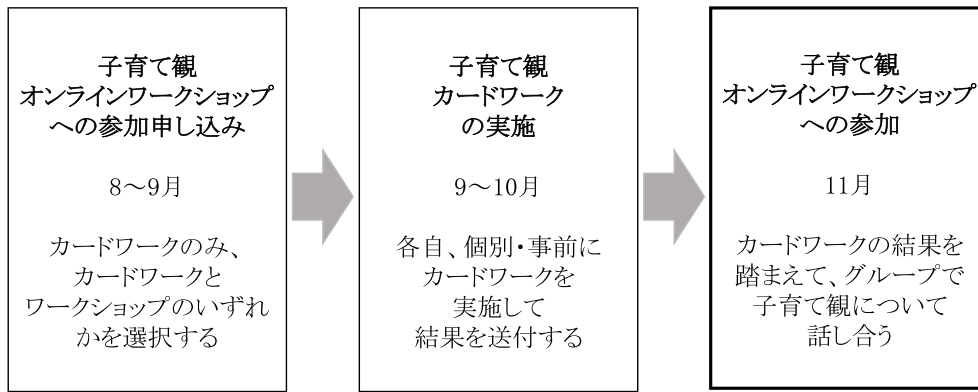


図1 障害のある子どもを育てる母親の子育て観オンラインワークショップまでの流れ

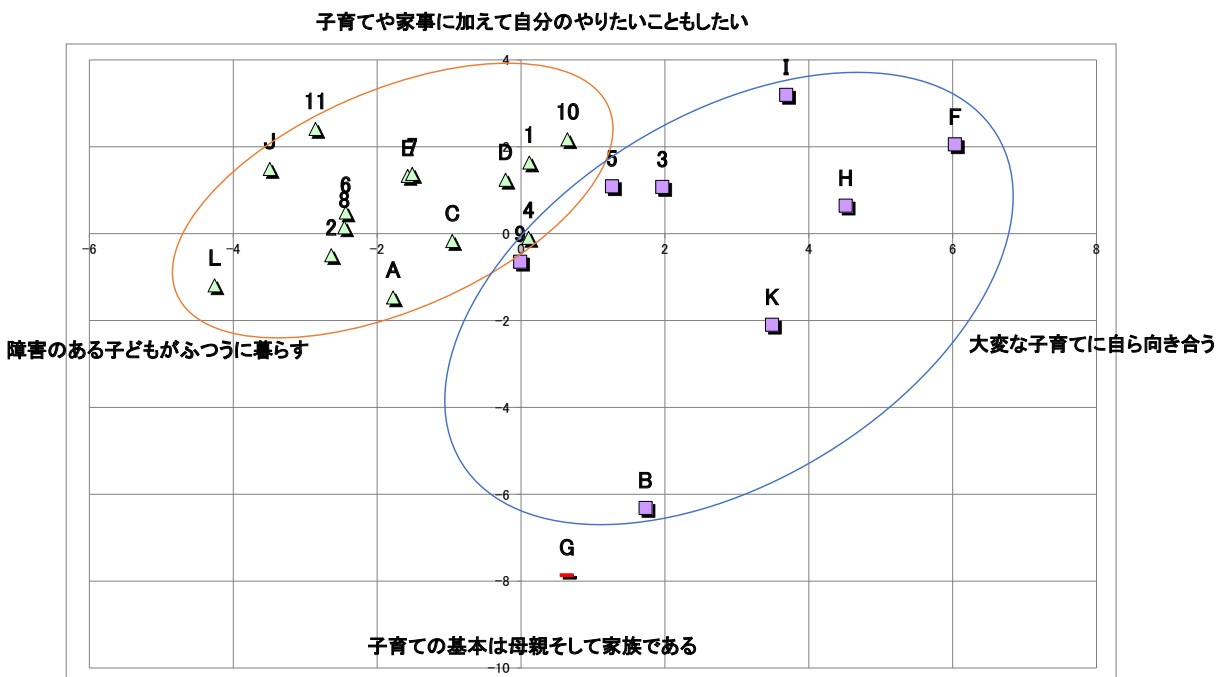


図2 Qマッピングによる障害のある子どもを育てる母親の子育て観

本研究全体において、Q分類法に参加した母親23人のうち、アルファベットは本研究対象者のワークショップに申し込んだ12人、数字はカードワークのみの参加者を表す。プロットの位置は主成分分析、プロットの形は因子分析の結果を表しており、△は第1因子、□は第2因子を表している。

Q分類の実施を依頼した。本ステートメントの例としては、「子どもが、日々楽しく過ごして笑顔でいる」「子育て・家事だけではなく、自分の仕事ややりたいことも充実させる」などであった。なお、ステートメントの内容の妥当性は予備調査を実施し¹⁵⁾、検討と修正を実施済みである。

参加申込みのあった23人の母親のうち、カードワークとワークショップ、双方への参加を希望したのは14人であった。参加したすべての母親の子育て観の分析は、並べたステートメントを個別に点数化したうえで因子分析を行った。そしてワークショップに向けて、二次元平面上にわかりやすく結果を可視化するために、

因子分析を行ったうえで主成分分析を実施し、第1・第2主成分における正・負の主成分負荷量から4つの特徴を抽出した。そしてQマッピングとして、直交座標の図上に個別の主成分得点をプロットし、因子得点をもとにクラスター化して母親の子育て観を明らかにした¹⁶⁾(図2)。このように図示することによって、参加者が、参加者全体のなかの自分の相対的な位置を知ることが可能となる。分析の結果、「子育てや家事に加えて自分のやりたいこともしたい」「子育ての基本は母親そして家族である」「障害のある子どもがふつうに暮らす」「大変な子育てに自ら向き合う」という特徴が抽出され、そこから次の二つの子育て観が明

表 1 障害のある子どもを育てる母親の子育て観オンラインワークショップの概要

時間 (120 分)	内容
14:00 ~ 14:10 (10 分)	オリエンテーション 本ワークショップのねらい・ゴール・内容についての説明
14:10 ~ 14:25 (15 分)	自己紹介 参加者・ファシリテーター・運営関係者, 全員の自己紹介
14:25 ~ 14:40 (15 分)	カードワークの結果の報告 Q 方法論を用いてとらえた母親の子育て観を説明し, 共有する
14:40 ~ 15:20 (40 分)	グループセッション 各グループで, 3 つの問いに沿って子育て観について話し合う
15:20 ~ 15:50 (30 分)	まとめ 各グループのファシリテーターから, グループの話し合いの内容の報告 参加者による感想の共有
15:50 ~ 16:00 (10 分)	参加者への御礼・アンケートのお願い

らかになった。一つは障害のある子どもの子育てや家事に加えて, 自分のやりたいことも大切にしたい, もう一つは子育てや家事以外の自分のやりたいことも大切にしながら, 大変な子育てに向き合いたいという子育て観であった。

2) 本ワークショップの運用

本ワークショップの概要を表に示す (表 1)。最初に本ワークショップのねらいを共有し, 自己紹介の時間を設けた。次に, 事前に行った Q 分類の結果を説明した。結果は, Q マッピングの結果である図 2 を最初は氏名のない形で示し, 自分がどこに位置するかを予想した。その後で氏名の入った図を提示した。次に, グループセッションの進め方を説明し, 3 つの問いとして, ①カードワークではどのようなことを思いながらカードを並べたか, ②このグループはどこが似ているのか, ③カードのなかで自分らしいカードはどれかについて意見を述べるよう依頼した。

1 グループの人数は 4 人とし, 各グループにファシリテーター 1 人以上を配置した。グループは, 図 2 に示した Q 分類法のクラスタリングを踏まえて, 類似した子育て観をもつ母親 4 人を 4 人ずつ 3 グループに編成した。また, ファシリテーターは全員が研究者かつ大学での教育経験をもっており, 事前に Q 分類の結果を把握してファシリテーションを担当した。ファシリテーター間では, 本ワークショップのねらいと流れ, グループセッションの進め方を記したファシリテーターガイドを共有したうえで進行した。

3. 調査方法・内容

本ワークショップ終了後, 参加者に対して Web 形式による無記名自記式アンケートを実施し, 参加直後

から 1 週間以内の回答を求めた。本ワークショップの評価としては, まず, 「本ワークショップに参加して満足できましたか」と質問し, 「満足できた」から「満足できなかった」の 4 段階で回答を求めた。次いで「本ワークショップをご家族や友人・知人に勧めたいと思いますか」と質問し, 「勧めたい」から「勧めたくない」の 4 段階で回答を求めた。最後に「本ワークショップに参加して, あなたが子育てや暮らしに関して気づいたことや考えたことを教えてください」と依頼して自由意見を求めた。データ収集は 2021 年 11 月であった。

4. 分析方法

研究対象者と子どもの基本属性, 選択式の項目は, 単純集計のうえ記述した。本ワークショップに参加して感じたことや考えたことは, 一つの意味内容を含む文章を一つの単位として, 文脈を損ねたり歪めたりしないようにデータ化した。研究者 1 人がデータを繰り返し精読し, 意味内容の類似するデータを集めて抽象度を上げて類型化を実施し, サブカテゴリーとコアカテゴリーを作成した。これらの結果は, 他の研究者と討議を行い, コードと各カテゴリーの整合性について, 合意するまで意見交換して結果を修正した。全研究者が結果を確認して最終の結果とした。

5. 倫理的配慮

研究対象者には, 事前に書面にて本研究の目的・方法等の説明をし, 本研究へ参加しない場合も不利益を被らないこと, 本研究の結果を公表する際, 個人のプライバシーは完全に守られること等を再度文書で説明し, 本研究の協力に対して書面による同意を得た。本

調査は、所属する茨城キリスト教大学倫理審査委員会（現所属：北海道大学大学院保健科学研究院）の承認を経て実施した（課題番号 2019-007）。

本ワークショップは、グループセッションでの話し合いを含むため事前に可能な限り Zoom のカメラ機能をオンにして参加する旨を説明した。ただし、子どものケアなどが必要な時は、子どもへの対応を優先させてほしいこと、終了後、知り得た個人情報他言することは控えるよう依頼した。また参加者本人が匿名を希望する場合については、事前連絡するよう伝えた。

Ⅲ. 結 果

1. 研究対象者の基本的属性

参加を希望した 14 人のうち 2 人は当日欠席となり、ワークショップの参加者は 12 人であった。そのうち、終了後アンケートに回答した 9 人を本研究の対象者とした。本研究対象者の母親は「30 代」2 人 (22.2%)、「40 代」5 人 (55.6%)、「50 代」2 人 (22.2%) であった。これらの母親の子どもの性別は「女兒」5 人 (55.6%)、平均年齢 10.7 歳であり、内訳は「幼児期」1 人 (11.1%)、「学童期」4 人 (44.4%)、「思春期」4 人 (44.4%) であった。また、これらの子どもの現疾患は「神経疾患（脳性麻痺など）」7 人 (77.8%)、「発達障害」2 人 (22.2%) であった。

2. 障害のある子どもを育てる母親の子育て観オンラインワークショップの評価

本ワークショップに参加して満足できたかでは、「満足できた」5 人 (55.6%)、「まあまあ満足できた」4 人 (44.4%) であった。また、本ワークショップを家族や友人・知人に勧めたいかでは、「勧めたい」6 人 (66.7%)、「まあまあ勧めたい」3 人 (33.3%) であった。

また、これらの母親が本ワークショップへの参加によって子育てや暮らしで気がついたことや考えたことについては、自由記述のデータを分類して、コアカテゴリーを【】、サブカテゴリーを< >を表に示した(表 2)。

分析の結果、【子育てする自分の価値観をみつめなおすことができた】【他の人の考えに触れて刺激を受けた】【いい時間を過ごすことができた】【グループワークの運営方法への課題がある】という 4 つの内容が明らかになった。

【子育てする自分の価値観をみつめなおすことができた】は、<自分が大切にしたいことを認識する>、<自分をみつめなおすことができた>、<自分の価値観の特徴に気づく>の 3 つのサブカテゴリーから構成された。次に、【他の人の考えに触れて刺激を受けた】は、<他の人の考えに触れてよかった>、<他の方の考えが参考になった>の 2 つのサブカテゴリーから構成された。さらに、【いい時間を過ごすことができた】は、<つながることの意味を感じた>、<参加できて楽しかった/おもしろかった>、<次の機会も参加したいと感じた>の 3 つのサブカテゴリーから構成された。最後の【グループワークの運営方法にさらなる工夫が必要】は、<少人数/ファシリテーターがいて話やすかった>、<グループのわけ方に工夫が必要>、<グループワークでの質問が難しかった>の 3 つのサブカテゴリーから構成された。

Ⅳ. 考 察

1. 障害のある子どもを育てる母親の子育て観オンラインワークショップの意義

本研究に参加した母親は本ワークショップに満足し、家族や友人・知人に進めたいと感じており、本ワークショップの機会を肯定的にとらえていた。具体的には、母親は、「子どもも自分も大切にしていきたいと思った」「自分を大切にすること、自分と子どもの人生を別々に考えるべきであること」と感じ、本ワークショップはあらためて自分をみつめなおし、どのように自分自身が子育てしながら暮らしていきたいかを考え、子育てする自分の価値観やその特徴を認識する体験であったと考えられる。

子育てする自分の価値観とその特徴を考えて認識することは、障害のある子どもを育てる母親にとって重要な意味をもつと考えられる。先行研究によれば、子育て期にある母親は、「母親としての自己」と「個人としての自己」という二つの自己の充実を望んでおり、この二つの自己のアイデンティティの葛藤や統合を経験し^{17,18)}、特に母親以外の自己の充実が満たされない場合には葛藤があるとされている¹⁸⁾。このような子育て期にある女性の価値観の統合、それに伴う葛藤という経験は、子どもの障害の有無にかかわらず現代の母親に共通している。そのため、自らの子育て観を考えて認識することは、価値観の統合や葛藤に対して有用と考えられる。しかし、子どもに障害がある場合、母

表 2 障害のある子どもを育てる母親の子育て観オンラインワークショップに参加して感じたことや考えたこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
子育てする自分の価値観をみつめなおすことができた	自分を見つめなおすことができた	<ul style="list-style-type: none"> ・時に立ち止まって自分の考えを見直したり、他人の考えを聞くということが、そのあとの子育てのプラスになるし、大切だなと思った。 ・自分の分析になってとても面白かった。 ・カードワークは自分を見つめなおせてとても良かったです。考えの偏りもよく分かったし、人それぞれ、大切にしていることが違うんだと思った。
	自分の価値観の特徴に気づく	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が選択する時に大事にする軸のようなものが何かわかった。 ・どうしても自分中心に物事を考えてしまうので、俯瞰してみれるようにしようと改めて思った。 ・子どもだけでなく、誰もが『自分らしく』主役の人生を歩んでほしいと願いますが、結局私は『自分軸』が強いということを痛感し、反省するところもあった。 ・自分の視野が狭いなあと思ったり、視点が広がった。
	自分が大切にしたいことを認識する	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもも自分も大切にしていきたいと思った。 ・子どもに接する上で、自分がまず健康でなければ(健常児でも同じですが)、難しいかとも思った。 ・更年期真っ只中なので乗り切って一緒に居られる時間を楽しみたい。 ・自分を大切にすること、自分と子どもの人生を別々に考えるべきである事
他の人の考えに触れて刺激を受けた	他の人の考えに触れてよかった	<ul style="list-style-type: none"> ・みなさんいろんな経験を経て、自分の考えをしっかりと持っておられて、とてもプラス思考で今の置かれている状況をとても前向きに捉えられていて、良い刺激を貰えた。 ・皆さん、今日のような集まりに慣れているようで発言、語彙力、考え方が素晴らしく、なにも考えずに参加した私は場違いだったかも…と思った。障害をもった子どもを育てている親として共感できることは多かったのでお話を伺えて良かった。
	他の人の考えが参考になった	<ul style="list-style-type: none"> ・障害児を育てる親とひとくくりでくくることは出来ず、それぞれの子どもの障害の程度や年齢によって、精神的な段階が異なるんだなと感じた。振り切れる段階に行けたら、また人生バツと開けるのかなと期待する。 ・他の方々の考えが参考になった。 ・非常に参考になった。 ・同じ障害児をもつ母親ではありますが、考えや軸となっている基準が様々で意見を聞くのはとても参考になった。
いい時間を過ごすことができた	つながることの意味を感じた	<ul style="list-style-type: none"> ・つながる事がお互いにとって大切だと思った。 ・コロナ禍でつながることがいけないうちになっていたので、逆につながれた嬉しさがひとしおだった。
	参加できて楽しかった/おもしろかった	<ul style="list-style-type: none"> ・運営の先生方や参加のお母さま方が皆さんとっても意欲的で、楽しい時間を過ごせた。 ・親の会は色々な所に参加しますが、今回は新しい視点で参加できました。面白かった。
	次の機会も参加したいと感じた	<ul style="list-style-type: none"> ・またこのような機会があればぜひ参加させていただきたいと思った。 ・とても貴重な機会をありがとうございました。父親バージョンやきょうだい児バージョンも心待ちにしています。
グループワークの運営方法にさらなる工夫が必要	少人数/ファシリテーターがいて話しやすかった	<ul style="list-style-type: none"> ・大人数の中では緊張してしまうと思うので、グループワークにしてくださいって話しやすかった。また各グループに先生方がついてくださったのもスムーズな進行につながったと思う。 ・グループに分かれて少人数になって、話しやすかった。人数が多いと緊張してしまうので。
	グループのわけ方に工夫が必要	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭環境や子どもの年齢も加味してグループなど検討されても良いかなと思った。きょうだいがいる・いない、シングルマザー、父の協力の有無などでかなり参加して楽しかった、そうでもなかったなどあると思う。 ・グループワークあつという間でしたが、他のグループの方とも話してみたかった。
	グループワークでの質問が難しかった	<ul style="list-style-type: none"> ・グループに分かれての3つの質問内容が少しわかりづらく意図と外れてしまう回答をしてしまった。グループの共通項を探すとしてもあまりにも短時間なので共通項が見つけれなかった。 ・場があたたまる前に共通点の質問はなかなか難しかったので、もう少し普遍的でしかも個人個人の心の中をのぞけるような質問を最初にしてもらえたら良いなと思った。例えば悩み事がある時に話をする相手はいますか?とか。

親は、わが子の障害を受け入れるという複雑な心理過程を辿り、さらにわが子の障害やその特徴によって必要なケアの獲得に努めるなど、通常とは異なる子育ての過程のなかで自身の価値観の統合や葛藤を経験する可能性がある。加えて、障害のある子どもの母親は、子どもが必要とする日々のケアにかかわる時間が長く¹⁹⁾、多くの場合、これらのケアに長期的に携わって

いる。そのため、自分がどのように子育てしたいかを自身で考え、振り返ることは簡単ではない。これらのことを踏まえると、子育てする自分の価値観とその特徴を認識する機会は、障害のある子どもの母親にとって、より重要な意味をもつと考えられる。

本ワークショップによりこれらの母親が、自分の価値観とその特徴を認識できた理由として、Q マッピング

グを用いて、同じ障害のある母親であっても多様な考えをもつことを可視化し、子育て観について話し合ったことに起因していると考えられる。本研究の対象者は、「同じ障害児をもつ母親ではありますが、考えや軸となっている基準がさまざま意見聞くのはとても参考になった」など、他の母親の考えを聞いたことを肯定的に感じていた。Qマッピングの効能として、同じ価値観をもつ人や異なる価値観をもつ人同士で話し合うことは、より自己や他者の考えを明確に理解でき、コミュニケーションが深まるといわれているように²⁰⁾、多様な価値観があることを前提に、他の母親の考えを聞き、自分が子育てや暮らしで何が大切かを考えることが、自分の価値観やその特徴を認識する機会につながったと考えられる。また、この多様性を感じる経験は、他の母親が同じ障害のある子どもを育てる母親であることが前提にあると考えられる。障害のある子どもの母親の集団を対象としたワークショップに関する先行研究において、母親は、同じ経験をもつ人と一緒に過ごすことを楽しみ、仲間意識を共有することが必要不可欠であり、帰属意識や社会的な交流を貴重な体験ととらえていたと報告されている²¹⁾。障害のある子どもを育てるという共通の経験をもつ母親同士だからこそ、自分との相違を肯定的に感じることで、自分をみつめなおすことにつながったと考えられる。

また、本ワークショップは、新型コロナウイルス感染症がまん延する状況を鑑み、オンライン形式で実施した。本研究の結果から、他者との直接的なかわりかもちにくい状況のなか、母親同士でオンライン上に集まったことが、参加した母親にとって他者とのつながりを感じ、いい時間を過ごせたと思う機会になったと考えられる。加えて、これらの母親は子どもの重症度が高い場合や、家事やきょうだいの世話による物理的な時間が無い場合など、さまざまな理由により外出が難しいことも多いと考えられる。そのため、自宅などの環境のなかで母親同士つながることは、これらの母親の特徴を踏まえた利便性の高い方法と考えられる。オンライン環境の普及や人々の意識の変化に伴い、このような手法を用いた支援は、今後拡大していく可能性が高く、支援におけるひとつのアプローチとなる可能性が考えられる。

2. 障害のある子どもを育てる母親の子育て観オンラインワークショップのすすめ方

本研究の対象者は、本ワークショップにおけるグループワークの運営方法にさらに工夫が必要と感じていた。具体的には、グループが少人数であったことやファシリテーターの存在により話しやすかったと感じる一方、家庭環境や子どもの年齢などを加味したグループや、他のグループの人とも話したかったという意見もみられた。ワークショップにおけるグループは複数のパターンが考えられたが、今回は1回のプログラムであり、母親の心理的安全を最優先して、類似した子育て観をもつ母親同士でグルーピングすることとした。子どもの年齢や発達段階、ひとり親などの家族構成は子育て観にかかわると考えられるが、今回、参加人数による限界もあり、それらのすべてを考慮することは難しかった。今後は参加する母親のニーズを踏まえつつ、どのようなグループ構成がより効果的か、また複数回のプログラムへの発展についてもより検討していく余地があると考えられる。

また、本研究の結果、グループワークでの質問が難しかったという意見もみられた。そのように感じた理由として、限られた時間、また、グループセッションに分かれてすぐ話し合いとなったため、質問への意見を出す難しさを感じた可能性もあると考えられる。したがって、短時間でも個々で質問を考える時間をとって話し合う、グループセッション開始時に再度、アイスブレイクを入れるなどの工夫も必要であったと考えられる。

3. 障害のある子どもを育てる母親の子育て観オンラインワークショップの可能性

先行研究において、現代の育児期女性の悩みは「育児に直接関連する悩み」だけではなく、「育児期の自分の生き方」に対する悩みをもっていることが指摘されている²²⁾。女性のライフコースが多様化する一方、わが国は欧米に比べて依然として、子育ては母親が担うという社会の人々の意識が高く、この変わる社会環境と変わらない社会的規範の相対する状況のなかで、母親は子育てを担っている。そのため、子育て期における母親の自己の葛藤や統合が育児困難に関連すること²³⁾、また、母親のもつ現実の自分と望む理想の自分のあり方のギャップが育児不安と関連することが報告されている²⁴⁾。これらを踏まえると、Q分類法を用い

て、母親が自らの子育て観を認識する本ワークショップは、現代の子育て期にある母親の育児困難や育児不安の軽減に対するひとつのアプローチとなりうる可能性が考えられる。

また、本研究の結果、Q 分類法を通じて子どもと自分の関係をあらためて認識した母親がおり、この点は発達段階ごとの親子関係が難しい場合がある障害のある子どもの子育てにおいて重要な視点と考えられる。このように、Q 分類法を用いたワークショップはさまざまな切り口での展開が考えられ、さらには実践そのものが支援になりうる事が期待される。石井・中川が、従来の自己犠牲をいとわず子どものケアに没頭する母親と距離を置く異なる母親が出てきており、これらの母親は障害のある子どもの母親役割に縛られないあり方を望んでいると報告している。このように²⁵⁾、子育てのありように伴って、多様なニーズをもつ障害のある子どもの母親が今後増えていく可能性がある。そのため、障害のある子どもの家族が主体的に子育てをし、母親自身そして家族の望む暮らしを叶えられるよう、これらの母親の価値観を踏まえた支援の提供が求められていると考えられる。

本研究の限界として、今回、ワークショップ終了後の限られた項目かつ少人数の主観的評価である点に加えて、これらの評価を Q 方法論で明らかにした子育て観と組み合わせることはできなかった。また、評価内容がどのような基本属性や背景をもつ人から得られたのかは明確ではない。さらに、本ワークショップはオンライン環境が難しい母親は参加することができず、本研究の対象者に一定の偏りがある可能性も考えられる。それゆえ、今後さらに当事者の視点と客観的な方法論を踏まえた計画・実施、精度の高い方法によって、検証を重ねていくことが必要と考えられる。

V. 結 論

障害のある子どもを育てる母親への子育て観オンラインワークショップを実施し、評価した結果、本ワークショップは母親にとって、自分をみつめなおすことを通じて、子育てする自分の価値観とその特徴を認識できることが明らかになった。Q 方法論を用いたワークショップは、質的方法と量的方法の混合研究法としてのツールというだけでなく、複数の視点を体系的かつ熟慮して探求する有用なツールとされている¹⁶⁾。

今後は Q 分類法に基づくワークショップの効果がより発揮できる工夫とともに、より多面的かつ精度の高い効果測定による検証が課題である。

謝 辞

本調査にご協力くださったお母様方に、心からお礼申し上げます。また本ワークショップの運営、本調査の遂行にご助力いただいた朝倉香陽様に感謝申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費 JP18K10478 の助成を受けた研究の一部である。

著者資格

松澤は研究の着想およびデザイン、データ収集、データ分析、論文執筆のすべてを実施した。吉澤は研究デザインへの貢献、データ収集、データ分析、原稿、研究プロセス全体への助言を行った。鳥本、眞崎はデータ収集、データ分析、原稿、研究プロセス全体への助言を行った。すべての著者は最終原稿を読み承認した。

本研究は利益相反に関して開示すべき事項はありません。

文 献

- 1) Yamaoka Y, Tamiya N, Moriyama Y, et al. Mental health of parents as caregivers of children with disabilities: based on Japanese nationwide survey. *PLoS One* 2015; 10(12): e0145200.
- 2) Matsuzawa A, Arai J, Shiroki Y, et al. Healthcare for children depend on medical technology and parental quality of life in Japan. *Pediatr Int* 2022; 64(1): e15006.
- 3) Ejiri K, Matsuzawa A. Factors associated with employment of mothers caring for children with intellectual disabilities. *Int J Dev Disabil* 2017; 65(4): 239-247.
- 4) 松澤明美, 涌水理恵, 西垣佳織, 他. 在宅生活する学齢期の障がい児を育てる母親の就労とその関連要因. *小児保健研究* 2019; 78: 334-342.
- 5) 厚生労働省. “令和 2 年版 厚生労働白書—令和時代の社会保障と働き方を考える”. <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/index.html> (参照 2022.07.07)
- 6) 坂野朝子, 武藤 崇. 「価値」の機能とは何か: 実証に基づく価値研究についての展望. *心理臨床科学* 2012; 2: 69-80.
- 7) Bardi A, Schwartz SH. Values and behavior:

- strength and structure of relations. *Personality and Social Psychology Bulletin* 2003; 29: 1207-1220.
- 8) 江上千代美, 塩田 昇, 恵良友彦, 他. 発達障がいのある児の母親の養育レジリエンスの向上を目指して—Stepping Stones Triple P (トリプルP) によるRCTを用いた試行的介入—. 福岡県立大学看護学研究紀要 2020; 17: 1-4.
 - 9) Bourke-Taylor HM, Joyce KS, Grzegorzczyn S, et al. Mental health and health behaviour changes for mothers of children with a disability: effectiveness of a health and wellbeing workshop. *J Autism Dev Disord* 2021; 1-14.
 - 10) Borek A.J, McDonald B, Fredlund M, et al. Healthy Parent Carers programme: development and feasibility of a novel group-based health-promotion intervention. *BMC Public Health* 2018; 18: 270.
 - 11) Wakimizu R, Fujioka H, Nishigaki K, et al. Development of family empowerment programs for caregivers of children with disabilities at home: interim report up to “implementation of pretesting”. *Journal of International Nursing Research* 2022; 1: e 2021-0004.
 - 12) 水内豊和, 島田明子, 成田 泉, 他. 自閉スペクトラム症幼児をもつ母親を対象とした子育てプログラムの効果—育児期の女性のアイデンティティの実態からの分析—. *小児保健研究* 2018; 77: 364-372.
 - 13) 陳 東, 森 恵美, 望月良美, 他. 乳幼児を持つ親に対する子育て観尺度の開発: 信頼性・妥当性の検討. *千葉看護学会誌* 2006; 12: 76-82.
 - 14) Watts S, Stenner P. *Doing Q methodological research -theory, method and interpretation*. London: SAGE Publications, 2012.
 - 15) 松澤明美, 眞崎由香, 吉澤 剛. 在宅で生活する医療ニーズのある子どもの母親の子育て観—Q方法論による予備的研究—. 茨城キリスト教大学看護学部紀要 2019; 10: 3-12.
 - 16) Yoshizawa G, Iwase M, Okumoto M, et al. Q workshop: an application of Q methodology for visualizing, deliberating and learning contrasting perspectives. *International Journal of Environmental and Science Education* 2016; 11: 6277-6302.
 - 17) 岡本祐子. 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究. *日本家政学会誌* 1996; 47: 849-860.
 - 18) 山崎あけみ. 育児期の家族の中で生活している女性の自己概念—母親としての自己・母親として以外の自己の分析—. *日本看護科学会誌* 1997; 17: 1-10.
 - 19) Luijckx J, van der Putten AAJ, Vlaskamp C. Time use of parents raising children with severe or profound intellectual and multiple disabilities. *Child Care Health Dev* 2017; 43: 518-526.
 - 20) 吉澤 剛. *科学の不定性と社会—現代の科学リテラシー—*. 東京: 信山社, 2017.
 - 21) Bourke-Taylor HM, Jane FM. Mothers' experiences of a women's health and empowerment program for mothers of a child with a disability. *J Autism Dev Disord* 2018; 48: 2174-2186.
 - 22) 穴井千鶴, 園田直子, 津田 彰. 「自分の生き方」をテーマにした育児期女性への心理的支援—Sense of Coherenceからのアプローチ—. *久留米大学心理学研究* 2006; 29-39.
 - 23) 豊田史代, 岡本祐子. 育児期の女性における「母親としての自己」「個人としての自己」の葛藤と統合—育児困難との関連—. *広島大学心理学研究* 2006; 201-222.
 - 24) 原口由紀子, 松浦治代, 矢倉紀子, 他. 母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連. *小児保健研究* 2005; 64: 265-271.
 - 25) 石井由香理, 中川 薫. 自分を犠牲にしないケア: 重症心身障害児の母親の語りからみるケア意識. *保健医療社会学論集* 2013; 24: 11-20.

[Summary]

This study evaluated an online workshop on child-rearing values conducted for mothers raising children with disabilities in Japan. This workshop considered the child-rearing values of mothers raising children with disabilities aged 1 to 18 years using medical, healthcare, and social welfare services in their daily lives. First, we requested a Q-sort to determine the mother's child-rearing values prior to conducting the online workshop.

In the online workshop, mothers divided into groups based on their values and assigned one facilitator to discuss on parenting. After the workshop, we conducted an online survey with the participants to evaluate the workshop. Nine participants responded to this survey; the age of the participants were: 2, 5, and 2 in their 30s, 40s, and 50s, respectively. The average age of their children was 10.4 years. Approximately 55.6% and 44.4% of the respondents were "satisfied" and "fairly satisfied" with the workshop, respectively. About 66.7% and 33.3% of the respondents found the workshop "recommendable" and "somewhat recommendable" to family, friends, or acquaintances, respectively. The participants also reported the following: "I recognized my own values," "I was stimulated by other mothers' values," "I had a good time at the workshop," and "I needed more creative ways to manage group work." In the study, these mothers considered it a meaningful opportunity to reflect on their values, discuss what was important for them in raising their children, and listen to the ideas of other mothers. In the future, we need to design a more effective workshop for these mothers using the strength of the Q-methodology and conduct a multi-method evaluation study.

Key words: children with disabilities, mothers, child-rearing values, online workshop, Q-methodology